

●山内盛博 [Space to Space / 1986 EXHIBITION OF OKINAWAN ARTIST WORKS 1 9・15-27]
SUKIMA
シナベニヤ、孔版用テトロン、アクリル絵具、92×69cm 1986



ARTIST

名古屋 山本敦子

平面における色と形の構造的な追求に創作の目的を見いだしたが、キュビズム以降現代に至るまでの、幾何学的抽象絵画の系列である。そしてこの系列に連なるさまざまな傾向の作品は、材質としての二次元平面へのストイックなまでの固執という点では、いずれも共通している。これはまったくあたりまえなことであるとはいえず、たとえば一部のオブティカル・アーティストたちが三次元性を利用した作品を手がけているという事実が示すように純粹にフラットな一枚の平面だけに素材が限られているのではないということも、また明らかなのである。しかし、この範疇の基本的前提は、たえずこの純粹平面の問題にたちかえるものであるし、一枚の平面という束縛があるからこそ、この限界内での造形の試行錯誤の意義も増加するのだともいえるだろう。

山内盛博の作品は、この一枚の

平面という束縛を少し解いてみせることによって、むしろ逆にこの拘束の意味を考えさせるものである。幾何学的な色図形を吹きつけたベニヤのうえに、同じ作業を施したスクリーンを張る。こうしてできた二重の画面は、形や色の意図的なズレや重なりあいによって、単一の平面では出てこない、奇妙な遠近感と一種の色のレインボー効果を生み出している。おそらく、シルクスクリーンをやる人なら誰でも一度はこれと似たようなことを考えるのではないかと思うが、あえてタブロー仕立てにはしないのは、やたらに難解なものをお好む日本人の性なのかもしれない。ごく一般的な意味で山内の作品はしごくきれいなものである。このきれいさが昂じると、室内装飾用の工業製品に限りなく近づいていくのではないかという危惧さえ覚えるほどだ。この二重構造の平面の前に立って、幾何学的抽象絵画における遠近法的イリュージョンismusのことなど、その是非をめぐってとりとめもなく考えたが、もとより是非の問題ではない。